



桃色看護日誌

～女医とナースと僕の日々～

斐芝嘉和

挿絵／英田舞

立ち読み版

KTC
KILL TIME COMMUNICATION



目次

Contents

プロローグ	4
第一章 淫らな指先	9
第二章 ぬめる唇	44
第三章 絡みつく舌	71
第四章 潤んだ秘裂	99
第五章 誘う尻	140
第六章 求める天使	174
第七章 縛られた処女	208
エピローグ	250

登場人物

Characters

鈴木 美沙緒

(すずもり みさお)

鈴木医院の院長である妖艶な女医。冷ややかながら妖艶な雰囲気を持つ、さばさばした性格のグラマー美女。真っ赤なスポーツカーで努を撥ねてしまう。

桃井 優子

(ももい ゆうこ)

鈴木医院の看護婦。明るく悪戯っぽい性格で人当たりがよい。巨乳で、童貞少年をいじるのが趣味。

栗野 ほづみ

(くりの ほづみ)

鈴木医院の看護婦。小柄で童顔、幼児体型。小動物のような雰囲気をしたナース。

鈴木 美夜子

(すずもり みやこ)

鈴木医院の看護婦。美沙緒の姪。切れ長の瞳で、他人を寄せ付けない雰囲気の美少女。

相川 努

(あいかわ つとむ)

美沙緒の車に撥ねられて鈴木病院に入院することになる高校生。



「気持ちよさそうにしていたでしょう？ それじゃあつまらないじゃない」

「……は、はあ……」

性根の優しい童顔看護婦は、先輩がなにを言い出したのか、一瞬分からなかったようだ。訝しげに眉を顰め、垂れ耳のようなツインテールを揺らして小首を傾げる。

なのに優子はますます得意げに、

「快感が苦痛に変わり、脂汗をダラダラ垂らしながら耐える男のコって、最高！ そのほうが、噴き出してくる精液も味が濃くなるし。だから、たっぷりじっくり、時間をかけて焦らすのよ。焦らして焦らして、男のコが泣き出すまで啜えてあげないの。それが——いえそれこそが、桃井流フェラチオ術の極意よ！」

「そ……そうなんですか？」

「そうなんですよ……って、メモ取らないの？ せっかく極意を教えてあげたのに」

「い、いえあの、ちゃんと覚えましたから……」

サディスティックな助言に、強張った笑みで応えるほづみ。

童顔の看護婦が優しい性格で良かったと、努は心底安堵した。これからしばらくの間、ギプスを嵌められっぱなしなのだ。逃げることも遮ることもできないこの状態で、焦らして焦らして焦らしまくるのが極意という桃井流フェラチオ術の使い手が交互に

襲いかかってきたら——考えただけでゾツとしてしまう。

もつとも、優子のテクニクは的確だから、ひとりいるだけなら悪くない。ねつとりとした舐め上げから一転、すっかり放置されていた淫棒が、早く続きをしてくれと疼き始めているくらいだ。

「まあいいわ。じゃあ、続きね」

後輩の不自然な態度を特に咎めることなく、あつさりどペニスに向き直る優子。

「焦らし方のコツは、キスと舐め上げを繰り返すこと。そして、強弱になるべく変化をつけること——よく見えていて。こんな感じよ」

言って首を傾け、艶やかな巻き髪を少年の太腿に弛ませて——ちゅじゅっ！

「はふっ!!」

淫茎のつけ根に生じた強烈な吸引感に、努は思わず仰け反った。

なのに熱い唇は離れることなく、ちゅううううっ！ と強く強く吸着し続ける。

そんな強烈なキスが、肉茎の側面に、裏筋に、カリ首に。

根元から亀頭まで繰り返すと、再び根元に戻り、今度は伸ばした舌を激しく閃かせながら、強張る裏筋をレチョ！ レチョ！ レチョ！ レチョッ！

「く……うう、ううっ！」

美女のしなやかな舌先が、敏感な淫棒に触れては離れ、また触れてくる。軽やかに躍り、いやらしくくねり——舐め取られる精液の代わりに、生温かくてヌルヌルした唾液がたっぷり塗された。

青筋を浮かべて鋼のように強張る肉茎の芯に、熱い溶岩が溜まる。

牡肉を弄ぶ美女の口唇に煽られたように、尿道に強烈な疼きが這い上がってきた。

鈴口の裏側に射精欲求が蓄積し、いまにも噴き出してしまいそうだ——が。

(だ、出さない、ぞ……今度は絶対に、出さない、ぞ！)

歯を喰い縛って耐える。

額に脂汗を浮かべ、クウクウと呻く。

簡単に出してしまつたら、いやらしい看護婦は満足しない。つまり、何度でも何度

でも舐めまくられる。

確かにフェラされると気持ちイイし、射精すれば快感だが、終わりがないとすれば話は別だ。いくら努が若くても、ものには限度がある。度を超せば、先ほど優子が言うていたように、苦痛になってしまうだろう。

「うふふ……ほら見て、ほづみ。相川くんが可愛くなってきた」

「そ、そうですね」

「じゃあ次は……うん、そうだわ。ほら、唾液が垂れているでしょう？ これをチュチュッと吸って、全部綺麗にするの。ほづみもやってみる？」

「えっ?! い、いいんですか!？」

いやらしい先輩に唆されたほづみが、努の許可を確かめることなくいそいそとベッドに這い上がってきた。どうやら、優子のいやらしい舌遣いを見ているうちに昂奮してしまっただけらしい。他人の唾液を吸うという、普段なら穢らわしく感じるはずの行為にも、まったく頓着していない。

そればかりか、昨日はあんなに嫌そうな顔で見えていた男根にも――。

「うわぁ……なんだかすぐく、硬そう……」

円らかな瞳を淫らな好奇心にキラキラと輝かせつつ、優子とは反対側――少年の腹側から、至極自然に顔を寄せる。

（温かい……けど、重い……あ？ ほづみさんのオッパイ、だ……）

患者用ガウンに覆われた腹に、柔らかな膨らみが押しつけられていた。ワンピースタイプのナース服を着ているとほとんど目立たないほづみの乳房だが、一応膨らんではいらぬようだ。

腹の上には童顔の看護婦、太腿をくすぐってくるのは優子の巻き髪――タイプの異

なるふたりの魅力的な女性にこんなにもピッタリと貼りつかれると、それだけでもう、努の心臓は高鳴って全身の血が沸騰する。童顔と美顔に挟まれた淫茎はますます硬く、太く、長くなり――。

「思い切つて、チュチュッと吸うのよ。やってみて」

「は、はい……」

――ちゅっ！　ちゆるるっ！

「くうっ!!」

優子よりも柔らかな唇が、強張った牡肉の側面に吸いついてきた。

先輩看護婦のキスよりまだきこちないが、しかしそれでも、躊躇いや怯えがまったくないから、昨日のほづみより格段に気持ちいい。

「あら、上手いじゃない。私も負けていられないわね」

裏筋側で美女が微笑み――ちゅぱっ！　ちゅじゅっ！

滾る淫棒の背と裏筋に、競うように繰り返される熱烈なキス。

たっぷりと塗されていた唾液はたちまち消え――ない。

音が立つほどのキスの合間に優子の舌が閃いて、

「ほら、ここにも垂れているわよ」

ほづみにキスさせたい場所に、新たな唾液を塗りつけてくるのだ。

「う……お、おおっ！」

プチュッと吸われた肉茎に、熱い快感が次々と弾ける。

温かくてプリプリとした舌先に軽く舐められた場所には、ねっとりとした唾液とともに甘い痺れが粘着いて——そこにほづみのぎこちないキスが襲いかかってくる。

それだけでも気が遠くなりそうなほど気持ちいいのに、

「くう、ああ……うっ!! ちょ、ちよつと……うわあっ!!」

仰向けのまま動けない努の胸を、四つん這いになったほづみが跨いだ。タイトなミニスカートの裾を押し上げ、白いガーターストッキングに包まれた太腿がハの字に開いて——息を呑んで目を睜^{みは}る少年の鼻先に、純白のシヨーツがピタッと貼りついていく小振りな美尻。

フェラに熱中して我を忘れ始めた童顔の看護婦が、努に秘部を見せつけるような、69の体勢になったのだ。

もちろん、下着に守られて割れ目そのものは見えない。

だが、二筋の柔らかな肉畝の形は、薄い股布にクッキリ浮き上がっている。

（お、おお……おま、おま……オマ○コっ!!）

童貞少年にとっては完全に未知な、神聖不可侵の艶めかしい禁忌。

それが、鼻に擦れそうなほどすぐ傍に――。

肌の色が透けて見えそうなくらい薄く白い下着越しに――。

息を吸い込めば、なにやらほのかに甘酸っぱい香り。

(ほ……ほづみさんの……ほづみさんの、オマ○コの、匂い……)

そう思った途端、努は淫棒を舐められる快感以上に昂奮してしまった。

ミチチ、メキキツと青筋を浮かべつつ、瞬く間に怒張し尽くすペニス。

亀頭が雄々しくエラを張り、肉厚の傘が赤々と輝く。

美女と美少女の鼻先では強烈な射精欲求を訴える鈴口がクプ、クプ、とヒクついて、
精液の混じった先走り汁を絞り出す。

「うふふ……また噴きそうになってきた。口相撲には丁度良いわね」

「く、口相撲？」

「そう。亀頭の両側から口を寄せて、ふたりで舐めたりキスしたりするの。で、射精液を呑んだ方が勝ち――さあ、行くわよ！」

「あっ!! 先輩ずるうい!!」

――ぬふ! にちよ!

勃起男根を挟んではしゃいだ看護婦たちが、努の亀頭の両側から柔らかな唇を押しつけてきた。

「ううっ!! く、くう……おおっ!!」

プリプリとして温かな四枚の唇に、硬く強張った淫肉が揉みくちやにされる。

同時に強く吸われ、閃く舌先でピチヨピチヨと舐められて――。

(オチンチンが、ズキズキ、する……!!)

疼痛を覚えるほど怒張するペニス。

鼻の頭をぶつけるようにして亀頭を舐め合う美女と美少女の狭間で、努の淫棒は滾る血潮を溜める。ズッシリ重くなり、ミチミチと軋む。

「ンぷ……ンちゅ。エラやカリ首を意識して。舌を伸ばして舐めてあげて」

「は、はい……」

真つ赤な牡肉に唇を触れさせたまま、ふたりの看護婦が秘めやかな囁き声を交わす。熱い吐息が敏感な鈴口にくすぐつたい。

優子のアドバイスを受けたほづみが首を傾げ、痛いほどに張りだしたエラ縁をびちよ、ぺちよ、と舐めてくれると、

「ひうっ!! あ、あ、あああっ!!」



熱い電流が淫棒の芯に走り抜けた。

勃起男根のつけ根に渦巻いていた射精欲求が一気に高まる。煮え立つ精液にグイグイと押し拡げられる尿道。

「くうう……う、うう……」

努の歯軋りに合わせ、ほづみと優子の唇が亀頭に触れる。

口を開き、紅くヌルヌルとした裏側を密着させて、滾る牡肉を包み込むように――。舌をくねらせ、カリ首に滲む牡エキスを舐め取って――。

「も、もう……ダメ、ダメええっ！ 気持ちよすぎてダメ、ダメ……出ます、出ちゃいますううっ！ ごめんなさあいつ！」

――びゅくっ！ びゅるるっ！ びゅばっ！

本日二度目の精液が、ふたりの看護婦の顔に勢いよく迸った。

* * *

「どう？ 少しは勉強になった？」

「はい。ありがとうございます、優子先輩」

「じゃあ今度は、ほづみひとりで作ってみなさい」

「は、はい！」

淫靡に熟した秘裂をあられもなく掻き開く。

「……ッ！」

艶やかに咲きこぼれる真つ赤な淫唇に、努は思わず息を呑んだ。

滲む愛蜜にヌラヌラと輝くそれは、まるで水飴を塗したカトレアのように。

菱形に開いた肉の潤みの上端に、一際ツヤツヤとした肉豆が痼とどっている。ぬめる粘膜の溪谷は、常日頃妄想していたよりも浅く——そして意外なほど下のほうに、小さな穴が見えた。

小指の先でも入るかどうか不安になるような、本当に小さな穴だ。

「分かるかな？ 相川くん。これが膣穴だよ」

「ほ、本当……ですか？ そんなに小さな穴に、お、オチンチンが……」

「良く伸びるのだよ、これが。自分でも呆れるほどに、な」

息をするのも忘れてマジマジと見入ってしまった努は、自分の肩に手を置かれるまで、目の前にいる美沙緒がなにをしているのか気づかなかった。

アッと思ったときにはすでに、黒のガーターストッキングに包まれたスマートな脚線美があられもなく開き——右脚がカマキリの腕のように高々と振り上げられ、

「うわっ!!」

車椅子の肘掛けに乗った努の腕に、絡みつくように乗せられてしまった。骨折部分を守る石膏ギプスが美沙緒の膝裏を支え、ミシッと軋む。

「ちよっと待って、待って待って……」

「大丈夫。この車椅子は特注品だ。二百キロまでの荷重に耐えられる」

「そうじゃなくって……あわわっ！」

焦る少年の首に、いやらしく微笑んだ女医の細腕が蛇のように絡みついた。逃げ場を求めてキョドキョドしている瞳に、弾む乳房がグイッと迫る。

「怯えるな。すぐに済む」

「お、怯えてるんじゃ、なくて……ぼ、僕、あの……心の準備が、まだ……」

「ペニスさえ勃っていれば、心の準備など要らぬ」

芳しい吐息が感じられるほどの近い距離で、嫣然と微笑んだ美沙緒が囁く。

車椅子の車軸が悲鳴を上げるのも構わずに左脚をまつすぐ伸ばし、努のギプスに引っかけた右脚へ体重を移す。

「ま……待って、待って……あ、あ、ああッ！」

焦る少年の目の前で、乳白色に輝く美沙緒の巨乳がゆさゆさ、たぶたぶ。

上下左右、視野を埋め尽くす美しい丸みに目を奪われているうちに、眼鏡が似合う

知的な美女は、車椅子の上に完全に乗り上がった。

カウチタイプの車椅子に乗せられている少年の、太腿、腰、腹へと連なるラインは鈍角で——そこに、股布のスリットを押し分けて艶やかに咲きこぼれた秘裂が、甘酸っぱい粘液を滴らせながら覆い被さるよう迫る。

いやらしい蜜に輝く粘膜花卉の真下には、赤々と輝く亀頭。

両者の間は十センチほど、それがすぐに五センチをきり、三センチ未満となり——。しかし努は見えていない。

（おっぱい、おっぱい……美沙緒先生の、なんて形の良い、おっぱい……ッ！）

羞恥と驚きと困惑に揺れる視界いっぱい、己の白濁液に穢れたたわわな美乳がプルンプルンと弾んでいるからだ。

頬に美沙緒の体温を感じるほど、近い。

咽ぶほどに濃密な精臭が、鼻腔へねっとり粘着いてくる。

（ううっ!! く、臭い……僕の精液が、美沙緒先生のオッパイに、こんなにたくさん、べっとり……そ、それにしても……大きい……全然垂れていないし……肌は白くて滑らかで……こ、こんなに近くに、ち、ち……乳首……ッ！）

車椅子の背もたれに体重を預け、ゆさゆさと弾む巨乳の艶めかしさに呆然と見惚れ

ていると——。

「ふあっ!!」

敏感な亀頭の先端に、熱くぬめるなにかが触れた。

熱い。

ネチヨネチヨしている。

唇に似ているが、もつと薄く、もつと濡れていて——筒先にヌッチヨリと貼りついたそれは、柔らかく歪みながら広がる。亀頭を滑り、範囲を広げて——。

「あ、ふ……おおっ!!」

努のペニスがゆつくり、ゆつくり、呑み込まれていく。

(なんだ!? ま、まさか……み、美沙緒先生の、お、おとおま、おままま……ッ!!)

心地よく滑る粘膜は徐々に窄まり——やがて亀頭の先端が、小さな穴にヌプツとはまった。しかしそこで止まることなく、

「く……う、ううっ!!」

蜜まみれの肉穴をこじ開け、ヌヌ、ヌヌ、とめり込んでいく。

生まれて初めて体験する、ねっとり熱いぬめり。

ほづみの口より狭く、心地よく締めつけてきて、肉槍の穂先を温かく包み込む。

「せ、先生え……美沙緒、先生えっ！」

「んん？ どうした、相川くん？」

「こ……これ、先生のオマ○コ……ですか!? さつき見た、あの小さな穴に……ぼ、僕のおチンチンが……く、ううっ!!」

自分のように冴えない少年が、美沙緒のような知的な美女と、まさか、こんなことになるなんて——信じられないが、事実だ。

いやらしい蜜に濡れた熱く深い穴に、亀頭が徐々に埋もれていく。

「そうだ。キミのおチンチンはいま、私の中に入りつつある……それにしても、ふ、太い……な。それに、硬い……こんなにも、あ、熱い……ふう、ンく……っ！」

半ば仰向けになった努の顔に精液まみれの巨乳をぶつけながら、首にしがみついた美沙緒が短い喘ぎ声を漏らし、さらに腰を落とした。

ぬ、ぬ——ぬぬぷっ！

熱い粘液に濡れた心地よい締めつけの最前線が、亀頭を完全に呑み込んでエラ縁を越えた。尖端の肉塊全体が熱く柔らかな粘膜にヌチョツと包み込まれる。喘ぐようにヒクつく壺口が、努のかり首をキュツと締め上げてくる。

「や……やめて、ダメ……せ、先生えっ！」

「ふ、は……ふう……どうした、相川くん？ まだ先つちよしか、入っていない、ぞ」
「だって熱い……あ、熱いッ！ 亀頭に、熱いヌルヌルが……うう、くううッ！ お、オチンチンが、熔けちゃい、ますうッ！」

ホオズキのように顔を赤らめた努が叫んでいる間にも、美沙緒の腰は徐々に下がりに続き続いていた。亀頭を包み込んでいた心地よい潤みが、鋼のように強張った淫棒の半ばまで達する。奥へ奥へと突き進む切っ先には、熔けた蠟に似た熱いヌルヌルが、いやらしく波打ちながら密着してくる。

（こ、これが……おま、んこ……これが女の人の、中……ッ!?!）

ほづみの口に咥えられるときも魂が吸い出されているのかと思うくらい心地よいが、ギユツギユツと締めつけてくる美沙緒の膣は、それ以上だ。

棹先の繊細な肉塊が、細かなヒダヒダに撫でまくられる。

肉棒に隙間なく絡みついてくる膣粘膜はいやらしく熟れていて、生き物のように蠢き、波打ち、濃密な愛液をカリ首や裏筋へヌチヨヌチヨと擦りつけてくる。

まるで、何十枚何百枚という舌の群にペニスを舐めまくられているような——無数の妖精に群がられ、小さな口でキスされまくっているような——。

「く、ふ……ううッ！ ようやく全部、入ったぞ。思った以上に長いな。先ほど視診

したときより、確実に長さを増している……それに……ンく、うう……か、硬い……ふふふ、硬い亀頭が、奥に当たって……ンふ。分かるか、少年？」

仰向いて呻く少年の腰をしつかり跨いだ女医が、整った顔を赤らめて妖しく囁く。

「私の奥に、あ、相川くんの、亀頭が……くっ！　ふう……あ、当たって……いる」「分かります、分かりますから……ああ……ううう……！」

勃起ペニスや太腿に美人女医の温かな体重を感じつつ、夢現に答える努。

（世の中に、こ、こんなに、気持ちイイことが……美沙緒先生のおマ○コ、熱い……し、締まる……しゃぶられ、るう……ッ！）

男根をぬっぱりと包み込んだ膣粘膜の締めつけは、手淫やフェラチオ、パイズリなどとは比較にならないほど気持ちよかった。

根元に迫る膣口は、努の巨根をキュツ、キュツ、と締めつけて——まるで菌のない菌茎に甘噛みされているようだ。

強張る肉茎には蠕動する粘膜が巻きつき、解け、また巻きついてくる。

プリプリとした膣壁も小刻みに波打ち、歪んで——亀頭のエラやカリ首、裏筋などに、小さなキスの雨が万遍なく降り注ぐ。

さらに——。

「ン……ふ、うう……こ、これは、思った以上に、良いペニスだ。淫茎の捻れと私の膣洞の捻れが、上手くマッチしている、な」

上擦った声で呟いた女医が、努の太腿の上でムチムチした尻を軽く捻った。その途端、

「くっ!! あっ!! ううっ!!」

ジユクジユクに熟れた膣洞の奥、子宮口傍の粘膜に、亀頭の尖端が擦れた。

鈴口周囲のもつとも敏感な牡肉に鮮烈な快感が炸裂し、鋼のように強張った淫棒に熱い電流が走り抜ける。

「ふふ……いまのはどうだ、相川くん？ 私の膣奥はどんな感じだ？」

「な、なんだか、プリプリした小さな粒々が……はうッ！ う、くううッ！」

鈴口周囲のもつとも敏感な淫肉が触れているのは、俗に言うかずのこ鯨天井。

胡麻粒ほどの肉芽が密生し、亀頭の尖端を磨くように動いて、ほかでは決して得られない鮮烈な淫悦を産みつけてくる。

「気持ち良いのか？ 良いのだな？ ふふ、私もだ。こんなに奥に、グリ、グリ、と

……く、うう……こ、これほどまでに、相性の良い、ペニスは……ふう、はあ……私も、はじ、め、て……だ！」



「むぷっ!! う、むううっ!!」

突然口を塞ぐ瑞々しい柔肌、頬や額にヌチュチュッと擦りつけられる青臭い粘液。膣奥を抉られて悦びに打ち抜かれ、我慢できなくなった美沙緒が、努の頭を細腕で抱き締めて深い乳谷へ埋もれさせたのだ。

「ああ、なんとということだ。こ、この私が、こんな……うう、ああうっ! なんと素晴らしい、ペニス……ふ、太い……硬い……ああ腰が、腰が……う、動くッ!」

車椅子の少年に跨った女医が、白衣の裾を翻して大きく上下に跳ね始める。

捲れ上がったタイトスカートから惜しげもなくはみ出しているムッチリとした桃尻が、右にくねり左にくねり——巨根に捲り返された壺口が、ぐっちゅぐっちゅと卑猥な音を立てながら甘酸っぱい愛液を噴きこぼす。

「ぷはっ?! うう……むぷ……ッ!」

弾む乳房の狭間、温かな柔肉に口と鼻を塞がれて、必死に呼吸する努。

その顔が紅いのは、息苦しさのせいではない。

（お、お、オチンチンが……オチンチンがああっ!）

揉まれ、しぼられ、しゃぶられる。

尿道の奥から精液を吸い出そうとしているかのように、美沙緒の熱い粘膜がしきり

に蠢き、努の男根を舐めまくりしごき上げ、ギユチ、ギユチ、と絡みついてくる。

「あはっ！ 美沙緒先生のお顔、すごくエッチ！ 相川くんのオチンチンって、そんなに気持ちいいんですか？」

「良い、良いぞ……ふは、はう……棹部の捻れが、Gスポットに……奥、奥にも……くあっ!? あう、あうううっ！ 奥に、硬いのが……グリグリ、イイッ！」

知的なイメージをかなぐり捨てるほどの勢いで、努の首にしがみついた美沙緒が伸び上がる。白衣に包まれた背がしなやかに反り返り、眼鏡の下で赤らんだ頬が淫らな微笑みを浮かべながら跳ね上がり――。

「ふおっ!? く、ううっ！」

愛蜜にまみれて熱くヌチヨヌチヨな膣穴に勃起ペニスを絞り上げられ、しゃぶりまくられ、恍惚に呻く努。

腰の上に乗った美人女医は自ら上下に弾み、裸の美乳を躍らせて、

「まさか、そんな……こ、こんなにも……くう、お、おおっ！ こんなペニス、初めて……こんな、こんな……うう、ああ、うううっ！」

あられもなくよがる。

自らの膣奥に弾ける快感に追い立てられて、グングン登り詰めていく。

眩しいほどに白い柔肌を、しっとり潤ませる甘酸っぱい汗。
跳ね上がる美顔に眼鏡がずれる。

柔肌の火照りを受けて、レンズが曇る。

奔放に跳ね回る乳房の尖端には、真っ赤な肉豆が健気に勃起。

「はふ、はう……あああつ！ イイ、イイ……奥に、奥にいいっ！」

努の淫棒の尖端が美沙緒の中の柔らかかな粘膜壁を突くたび、喘ぐ唇から甘く震える
鳴き声が、際限もなくこぼれ出す。

（こ、これは……これが、セックス……なのか！）

重々しく縦揺れする巨乳に顔を揉みくちやにされながら、努は全身の血が沸き返る
ような昂奮を覚えていた。

しゃぶられる男根も快感だが、それ以上に——喘ぎ悶える美沙緒が愛おしい。

先ほどまであんなに意地悪で怖かった知的な美女が、

「もつと、もつともつと……あ、相川、くうんっ！」

仔犬のような声で鳴き、柳腰をくねらせて膣を鋭く絞ってくる。屹立したペニス
が子宮口周囲の厚い肉膜を突き上げるたび、新たな愛蜜がじゅわ、じゅわ、と滲み出
して、肉の悦びが加速していく。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! 19日発売!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのパックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のお愉快的Blogも更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・cranberryをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!